

## 三大秘法（宗旨の三箇）⑤

### — 本門の本尊 —

#### 三大秘法は末法の三学

私たちが成仏するためには、いったいどのような修行に依ればいいのでしょうか。

このことを仏教で具体的に説いているのが、「戒・定・慧」の三学です。つまり、悪を止めて善い行いを勧める「戒」（防非止悪の義）と、精神を統一し心の散乱を防ぐ「定」（静慮の義）、さらに、悩みの根本を明らかにし、仏の説く真理を体得する「慧」（照明の義）です。

これは、仏教すべてに説かれています。小乗・大乘の教えと正像末という、時によりその修行は異なります。そこで日蓮大聖人様は、久遠元初以来の妙法に具わる三学を三大秘法として整足されたのです。

#### 三大秘法開合の相

三大秘法とは、本門の本尊と戒壇と題目です。本尊は「人」と「法」、戒壇が「事」と「義」、題目が「信」と「行」とに開かれて六大秘法となり、さらに開けば八万法蔵となるのです。

反対に、八万法蔵は六大秘法に収まり、それが最終的に、一大秘法である本門の本尊に収まります。したがって、一大秘法の本門の本尊を、三大秘法総在の本尊とも称するのです。

このように、大聖人が顕わされた三大秘法が一切法の源であり、その根本は本門戒壇の大御本尊に帰結するのです。

#### 本尊の字義

「本尊」という言葉には、根本尊崇（大法の根本であるから尊い）・本来尊重（もとから尊ぶべきもの）・本有尊形（もとのままの尊き姿）の三つの意義があり、それぞれ体・用・相を現わしています。

故に本尊とは、最も勝れているものを用いることが肝心です。

#### 法の本尊

まず第一に法の本尊について、『草木成仏口決』に、

「一念三千の法門をふりすゝぎたてたるは大曼荼羅なり」（御書 五二三頁）

と示されています。これは、本尊とは一念三千の妙法を顕わしているということです。

つまり、大聖人は五重相對・五重三段の判釈はんじゃくによって、寿量文底ひちんに秘沈ひしんされている久遠元初・事じの一念三千の妙法蓮華經を説き出だされ、それを本門の本尊として顕わされたのです。「法華經の題目を以て本尊とすべし」とか、「妙法蓮華經を本尊」等、御書の諸文に示される法本尊に関する御教示は、すべてこのことを言います。

また『当体義抄』には、

「至理しりは名無し、聖人理を觀じて万物に名を付くる時、因果ぐじ俱時・不思議これの一法これ之有り。之を名づけて妙法蓮華と為す。此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減けつげん無し」(同 六九五〇)

と、この久遠元初の妙法を詳しく示されています。

このことから大聖人の大漫荼羅本尊は、十界互具・事の一念三千の当体を顕わしたものとと言えます。

## 人の本尊

次に人の本尊にんについて述べると、一般日蓮宗各派においては、『報恩抄』の、

「本門の教主にん釈尊を本尊とすべし」(同 一〇三六〇)

との御文等によって、早計に色相莊嚴の釈尊像を本尊と立てています。これは御書の真意を拝せない故の誤謬ごびゅうと言えます。

この御書に示された「教主にん釈尊」とは、寿量文上の教主釈尊ではなく、寿量文底の教主・久遠元初じじゅうゆほうしんの自受用報身如来のことです。

『三大秘法抄』には、

「寿量品に建立する所の本尊は、五百塵点そのかみの当初このかたより以来、此土有縁深厚・本有無作三身の教主にん釈尊是なり」(同 一五九四〇)

さらに『三世諸仏総勘文抄』の、

「釈迦如来五百塵点じんてんごう劫そのかみの当初おわ、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座さとに悟りを開きたまひき」(同 一四一九〇)

との御文によれば、末法の本尊となる仏は久遠元初本因妙・名字凡夫位の本仏釈尊であり、インドに出現した寿量文上の色相莊嚴・本果脱益の釈尊とは、天地、水火ほどの勝劣があります。この名字即の凡夫位の御姿をもって一切衆生に本因下種の御化導をされる方こそ末法の本仏であり、それは宗祖日蓮大聖人をおいて他にいらっしやいません。故に大聖人げゆうを外用は上行再誕、内証は久遠元初じじゅうゆほうしんの自受用身と拝するのです。

## 人法一箇の本尊

以上、法の本尊・人の本尊と分けて示しましたが、本尊に二種類あるわけではありません。

先の『三世諸仏総勘文抄』の御文によると、久遠元初の仏は、「名字凡夫の位」で「我が身は地水火風空なり」と「即座に悟りを開いた」わけですから、人法不離・人法一箇であることが判ります。『当体義抄』の「因果具時不思議の一法・名づけて妙法蓮華」と、「我が身は地水火風空」とは同じことを示されています。

もともと不離相即そうそくの久遠元初の仏と妙法が末法の本尊と現われるのですから、この本尊は人法一箇の本尊であり、「久遠元初の自受用報身如来」即「事の一念三千の南無妙法蓮華経」なのです。

### 大聖人の御当体即本門の本尊

先に述べたように、大聖人の御内証が久遠元初の自受用報身如来ですから、この本門の本尊は、大聖人の一身の御当体であると言えます。『経王殿御返事』には、

「日蓮がたましひをすみ魂にそめ墨ながしてかきて候ぞ、信じさせ給へ」（同 六八五頁）と、その意を明確に示されています。

この本門の本尊は、内証久遠元初の本仏たる大聖人が末法に出現して、初めて顕わされた本尊なのです。

### 本門の本尊は弘安二年の大漫荼羅

大聖人は多くの漫荼羅本尊を顕わされましたが、その中でも、弘安二年十月十二日御凶顕の大漫荼羅を究極中の究極の本尊とし、本門戒壇の大御本尊と尊称します。今日、日蓮正宗総本山大石寺に厳護し奉る大御本尊です。これこそ三大秘法総在の本門の本尊です。

総本山第二十六世日寛上人は、『観心本尊抄文段』に、

「此の本尊の功德、無量無辺にして広大深遠みょうゆうの妙用しばら有り。故に暫くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、則ち祈りとして叶かなわざる無く、罪として滅せざる無く、福として来たらざる無く、理として顕われざる無きなり」（御書文段 一八九頁）と示されています。

唯授一人の血脈相伝によって正しく現代に伝えられるこの本門戒壇の大御本尊には、このように一切衆生の罪障を消滅し、真実の幸福を得さしめる久遠元初の御本仏の仏力と、事の一念三千の南無妙法蓮華経の法力とが俱ともに具わっているのです。

一方、たとえそれが大聖人直筆の漫荼羅であったとしても、他の本尊はすべて一機一縁のために顕わされた本尊です。根本の本門戒壇の大御本尊を離れば、直ちに本尊としての力用りきゆうを失ってしまうことを知らねばなりません。